



新しく、8年合わせて関大一の部長は4人。昨夏の大阪大会準優勝、そしてセンバツ出場と、滋賀区・大阪にあって最も勢いのあるチームだ



言い分。選手にとっては、やはり「絶対に負けたくない相手」のようだ。関西学院・平野雄也主将は関大一を評して「投手の久保君がすごいなあという印象が強いですが、全体的なイメージとしては、僕らより力タイというが、団体行動がキッチリしてるなあと思いますね。自軍の長所として挙げたのが「元氣よく声を出すところと明るさ」。もし甲子園で関関戦が実現したら、「最近2試合は引き分けなの

138.5を計時した注目の右腕・久保康友は、奈良県橿原市から「乗り換えがうまくいって片道1時間半」の時間をかけ、高槻市にある学校まで通っている。奈良県生駒市、あるいは兵庫県の三田市から通っている部員もいる。「だから、平日は練習時間を多く取れないんです」と尾崎監督。効率を重視し、練習は長くて3時間というのもチームの共通項だ。

こうしてみると、関西学院と関大一は、対抗心を燃やしながらもどこかで互いの良い部分を吸収し合っているようにも思われる。関大一の長尾宏校長は、「第1回の関関戦の時にこんなことがあったんです。開会式で関学の生徒さんは大声で校歌を歌っているのに、ウ

関大一の命運を握るのが、本格派右腕の久保だ

69年前に「關西甲種商」の校名で甲子園に一度だけ出場した関大。校内にはその校名変遷の歴史を刻んだ碑が立つ



子の生徒はまるで元氣がなかった。関学の良い部分をぜひ見習おうと、第2回大会からは校歌の練習をしてから臨んでいるんです。生徒だけでなく教職員同士の交流も活発で、「いがみ合うライバルではなく、切磋琢磨して一緒に上を目指して行こう」という関係です」と言う。

しかし、それはあくまで大人の

で、はっきり勝負をつけた。もちろん勝つのは関学です」と自信をのぞかせる。

神戸・吉田中時代は生徒会長を務めていたというエースの神英利は、「ホクみみたいな小さい(168センチ)選手でもチームの中に仕事がある。個人の力ではなく、全員で野球をやるところが関学の良さ」と話す。関大一のエース・久保と